

活動の開始と発話の冒頭に用いられる「ごめん」 —断りを入れる発話との関係を中心に—

The use of Gomen at the beginning of an activity and utterance: Exploring the relationship with *Kotowari o ireru* utterance

梁 勝奎

YANG, Seungkyoo

摘要

In Japanese conversation, the action of "断りを入れる" (*Kotowari o ireru*) is frequently used. This type of action refers to what the speaker does now or intends to do henceforth. Also, this action needs the recipient's approval, permission, or recognition. A notable characteristic of this action is that it does not assume that the recipient will not accept the act. In addition, it tends to be used along with apology expressions. This study examines the role of the apology expression "gomen" (sorry) used in conjunction with the utterance of *Kotowari o ireru*. Upon collecting the data, it was found that "gomen" was mainly placed at the beginning of utterances when used with *Kotowari o ireru*, with only one case placing "gomen" after this utterance. Therefore, we considered uses of the expression "gomen" produced a front of a *Kotowari o ireru* utterance. Furthermore, this study focuses on the sequential positioning and describes how the target utterance works as an interactional resource. The analysis showed that "gomen" not only indicates a speaker's intention for the subsequent utterance or activity to warrant an apology from the recipient but, when used at the onset of an utterance, also signifies the initiation of a new activity distinct from the previous activities. Furthermore, according to the analysis results of classification based on the sequential position, it is thought that if an utterance is produced in the middle of a sequence or activity, it is intended to start new activities and suspend existing ones.

キーワード： ごめん 断りを入れる 活動の開始 会話分析

Keywords: *Gomen Kotowari o ireru* Initiation of activity Conversation Analysis

1. はじめに

人々は社会の中で様々な活動を行い、その中で他人とやり取りをしながら生きていく。他人とのやり取りの中には、依頼や質問など、相手に何かを強く求める行為も存在するが、相手に

ただ伝えるだけで、相手から何かをしてもらうことを求めない行為もある。次の2つの例は相手に何かを伝えてはいるが、発話の内容自体は話者自身が今していること、あるいはこれからすることについて説明しているものであり、相手に何かを求めているものではない。

- (1) ((Aの自宅を訪れた来客をリビングに通した後))
A: これだけ先に冷蔵庫に入れておきます。
 ((A、キッチンの方に移動))
- (2) ((居酒屋でテーブルの上に皿がたくさん置かれている))
B: ちょっとここに置くね。
 ((B、相手のすぐ前に徳利を置く))

以上の2つの作例で発話者が行っている行為は相手に自分が今何をしているか、あるいはこれから何をするかについて説明しているが、相手に何かの行為を強く求めてはいない。このように話者が今していること、またはこれからすることを述べることを「断りを入れる」行為と言う。断りを入れる行為は一般に承認を得るために事前に知らせることにも使えるが、本稿では、以下2つを満足させるものだけを「断りを入れる」行為として扱うことにする。

- ① 現在の話者がこれからする（または今している）ことを述べる。
- ② 話者が行っている内容が相手の認識が必要なものである。

断りを入れる行為は話者が今行っていることが何かしらの形で相手に迷惑や負担をかける可能性があることを示している場合が多い。(1)では来客中にも関わらず、席をはずすこと、(2)は相手の領域にもものを置くことで相手に迷惑をかける可能性があると考えられる。

このような断りをいれる行為を構成するときには謝罪表現を伴うこともよくある。ただし、実際の会話ではすべての謝罪表現が同じ頻度で使われるのではなく、「ごめん・ごめんなさい・ごめんね」のような「ごめん」系の謝罪表現がよく使われる。

このような傾向に基づいて、本研究では断りを入れる発話に用いられる謝罪表現「ごめん」の働きに注目する。特に、断りを入れる発話の冒頭に置かれる「ごめん」を分析し、「ごめん」がどのような相互行為上の機能を果たすかについて考察する。⁽¹⁾ 「ごめん」は単独で使うこともできる言語資源ではあるが、本研究で扱っているデータでは「ごめん」とその次に来る文が切れ目なく続いていたり、「ごめん」の「ん」の音を伸ばしてからすぐ発話を続けるなど、「ごめん」とその次の文を一つの行為として産出しているケースが多かった。したがって本研究では「ごめん」を断りを入れる行為の一部として扱い、分析を行う。

1. 1. 断りを入れる行為

日常生活の中で、相手とのやり取りではなく、一人で何かをするときは何も発話せずその行動を行ってもいい。しかし、その時にわざと自分が現在どのようなことをしているかを相手が認識できるように発話する場合もある (Goodwin, 1987)。断りを入れる行為もその行為の一つである。

断りを入れる行為は、その行為で示している活動を実施する者は話者自身であり、相手はその活動のためにしなければいけないことがほとんどない場合が多いという特徴がある。これは相手に何かを求める行為である「依頼」や「質問」のような行為とは区別される点である。断りを入れる行為のもう一つの特徴は、話者が相手の承認や許可を求める発話形式を用いて発話を産出していても、相手の反応が産出される前にすでにその活動を開始する場合が多いことである。本研究で扱うデータの中でも相手が話者の活動を行うことを拒否する場面はほぼなかった。⁽²⁾つまり、話者は相手の反応がなくてもその活動を実施することはすでに決まっているようなものとして扱っている。

断りを入れる行為は様々な発話形式を用いて行為を産出することができる。(1)～(2)で提示したように宣言や告知の形式で行為を行う場合もあれば、相手に許可を求める発話形式で産出される場合もある。ただし、上述したように、許可を求める発話形式を用いたとしても話者は相手に承認や受諾を強く求めているようには見えないという特徴が許可を求める行為とは区別される点である。このようなケースについては断片(3)で具体的に考察する。

1. 2. 断りを入れる行為と謝罪表現

断りを入れる行為を通して、話者は自身が行う活動を相手に何も告げずに行った場合、失礼にあたることを認識していることを示すことができる。このような行為の性格は、行為を組み立てるときに謝罪表現を含めることを適切にする。断りを入れる行為に用いられる告知形式や許可を求める形式は、相手に自分が行うことを告げることができるが、相手に謝る気持ちを伝えることはしていない。したがって断りを入れる行為を構成するときには謝りの気持ちを示す謝罪表現を伴うことがよく見られる。

一般的に謝罪表現には、「すみません・すいません・すまん」などの「すみません」系と、「ごめん・ごめんね・ごめんなさい」などの「ごめん」系があると指摘されている (山本, 2004; 滝浦, 2008 など)。しかし、断りを入れる行為と一緒に使われるのは、本稿で扱っている会話データの中ではほぼ「ごめん」系のみであった。データを収集してみた結果、「すみません」系はあまり使われておらず、「すみません」系の謝罪表現が用いられた断りを入れる発話は2例しか収集できなかった。⁽³⁾それに対して「ごめん」系はデータ全体の中で32例収集できた。また、「ごめん」が発話の中で産出される位置が断りを入れる発話の後に用いられるケースは1例だけであり、残りの31例では「ごめん」と言った後に断りを入れる発話が用いられていた。

謝罪表現	断りを入れる発話の前	断りを入れる発話の後	合計
「ごめん」系	31	1	32
「すみません」系	1	1	2

表 1. 収集したデータの数

上述したように、「ごめん」が断りを入れる発話を一緒に産出するのは話者が今行っている活動が相手に負担や迷惑をかけている可能性があるからであるが、それだけではなぜ「ごめん」が断りを入れる発話の後の位置ではなく、その発話の前に置かれるのかについては説明ができない。この問題を解決するため、本研究では「ごめん」が産出されている連鎖上の位置に注目し、断りを入れる発話の前に用いられる「ごめん」がどのような働きをしているのかについて考察する。

2. 先行研究

謝罪は、過去のある行為が相手に負担をかけたこととして認識し、相手との関係の回復に寄与する行為だと定義されてきた（佐久間, 1983; 熊谷, 1993 など）。このような定義には謝罪する対象になるものがすでに起きたこと、つまり過去のこととして定義されている。しかし、謝罪が依頼のように特定の行為とともに使用されるときは謝罪する対象がまだ起こっていない場合にも用いられると指摘されている（頼, 2008）。謝罪表現は我々の日常の様々なところに用いられていて、謝罪の機能について考察する様々な研究が行われてきた。

2. 1. 謝罪表現と関係性に関する研究

謝罪表現に関しては話者と相手との関係性に関する研究が盛んに行われている。Brown and Levinson (1987) が提唱したポライトネス理論では、自分の行動を妨害されたくない欲求（ネガティブ・ポライトネス）を達成する手段（ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー）として謝罪を捉えている。

Brown and Levinson (1987) は謝罪表現をネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとして扱っているが、それを具体的に分類してはいない。それに対して、日高 (2017, 2019) は「ごめん」系の謝罪表現「ごめん・ごめんなさい・ごめんね」を単にネガティブ・ポライトネス・ストラテジーという大きい枠に入れるだけではなく、より具体的に分類している。日高の研究では社会的距離は話者と相手との力関係、行われていることの負担度などを中心に、「ごめんね」や「ごめんなさい」の場合は認められたい欲求を達成する手段であるポジティブ・ポライトネスに転換が生じているものであり、「ごめん」と区別することができると指摘している。

頼 (2008) は、依頼するとき用いられる謝罪表現について考察を行い、「人間関係」、「場」、「依頼内容」、「当然性」などを考慮して恐縮の意が生じる場合、依頼をするときに謝罪表現を

用いる傾向が強いと論じている。

以上の研究では人と人の関係性が謝罪表現を使う際の重要な判断基準になっていることを示している。しかし、これらの研究では謝罪表現を使っているかどうかには注目しているが、その謝罪表現が発話のどの位置に用いられているかについてその機能の違いについてはあまり注目されていない。

2. 2. 謝罪表現の位置に関する研究

謝罪表現の産出位置についての研究もある。頼（2008）は謝罪表現の位置について具体的に分析してはいないが、依頼の内容を相手が受諾する可能性が高い場面では「申し訳ありませんが、～」のように謝罪表現が先行することがあると言及している。ただし、頼の研究では「申し訳ありません。」のように謝罪表現が単独で使われるのではなく、「申し訳ありませんが、」のように文の一部として用いられているものを対象にしていたことと、電子メールでの発話だけを研究対象としているので実際の会話での使用とは異なる可能性があるという限界がある。

岸本（2019）は、申し出（offer）の受け手が相手から何かをもらうときに単に感謝の表現を用いるだけではなく、感謝表現の前に「すいません」のような謝罪表現を用いることが相互行為上重要な働きをしていると指摘している。岸本の研究では申し出に対して感謝だけで受け入れることは、感謝を伝える話者にとって、相手の申し出を受けることが当然であるスタンスを示す可能性があり、感謝を示す前に謝罪表現を先に使うことによって、相手の申し出は当然なものではないスタンスを示すことができると指摘している。

以上のように、謝罪表現の研究は様々な観点で行われているが、謝罪表現がどの行為と使われ、どの会話の位置で産出されるのかによってその機能がこのなる可能性があるにもかかわらず、このような見方の研究はまだあまり蓄積されていない。本研究では会話のどの位置に研究対象になる発話が産出されているかに注目し、断りを入れる行為の冒頭に用いられる「ごめん」の機能について考察を行う。

3. 研究対象およびデータ

本研究では謝罪表現「ごめん」が会話の流れの中で、どのような働きをしているかを明らかにするため、会話分析（Conversation Analysis）の手法を用いて分析を行う。また、実際の会話での「ごめん」の使用を確認するため、ロールプレイなどの作られた会話ではなく、実際の日常会話を録音・録画したデータを研究対象にする。使用データは国立国語研究所が提供する『日本語日常会話コーパス（Corpus of Everyday Japanese Conversation）』（小磯他, 2022）の約 200 時間のデータ、筆者が所属している大学の研究室で共有されている約 12 時間のデータ、筆者が独自で撮影した約 10 時間のデータから断りを入れる発話と「ごめん」が用いられるケースを収集

した。その結果、断りを入れる発話の前に謝罪表現「ごめん」が用いられるケースを 31 例収集することができた。データの書き起こしは Jefferson (2004) の技法に基づいて、日本語に合わせて修正して用いた。

本研究では、「ごめん」が産出される発話のなかでどの位置に置かれているかだけでなく、「ごめん」を含む発話が会話の流れの中でもどの位置で産出されているかについても分類した。本稿では 31 例の中で多く見られた①現在行われている発話や活動の途中に研究対象になる発話が産出されるケース (10 例)、②会話や活動が完了した後の位置に産出されるケース (16 例) を中心に分析を行う。

4. 会話の流れの途中に産出される発話

本章では、断りを入れる行為が相手の発話や現在行っている活動などのように、現在行っている相手とのやり取りがまだ完了していない位置、すなわち会話の流れの途中で産出される例を中心に、謝罪表現「ごめん」の働きを考察する。特に、相手の発話の途中で産出されるケースと、相手の発話の途中ではないが、現在行っている会話がまだ収束されていない位置で産出されるケースについて分析していきたい。

まず、相手の発話が産出されている途中で断りを入れる行為が産出されるケースを見ていきたい。発話の途中で始まる断りを入れる発話の内容は、直前まで行われていた会話の内容とは異なる性格を持っているように見える。断片 (3) は正裕が運営している美容院で小川が髪を切ってもらっている場面である。断片の直前から二人が住んでいる地域の政治家である「近藤太郎」が話題になっている。ターゲットになる発話は「➡」矢印と太字で表記してある。記号「|」は図の動作が始まる時点を示している。

(3) 【CEJC_T015_008b_04:38】⁽⁴⁾

- 01 正裕: んで近藤太郎だっけ?[近藤太郎(.)って:(あの)
 02 小川: [うん
 03 (あの)チャリンコで走ってる:[兄ちゃんだ[よね
 04 正裕: [はい [そうそ.
 05 (0.7)
 06 正裕: 最近所帯持って:子[供ができたみたい(ん)で,
 07 小川: [う:ん
 08



図 1

- 09 正裕: まああちこち顔[出してんだろう[けど
 10 →小川: [あ [ごめん]ちょっといい電話でて。
 11 (0.2)
- 12 正裕: | どうぞどうぞ。
 13 (1.9) ((小川, 電話を受ける))
 14 小川: もしも::し
 15 (1.1)
 16 小川: あ, ごめんね

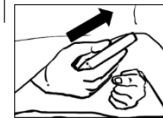


図 2



図 3

ここで主に話をしているのは正裕であって、小川はそれに合わせて反応をしたり(02行目)、自分の理解を確認したりするなどして(03行目)、二人は会話を続けている。その後も正裕は話を続けていて、06行目の最後のところでまだ発話は完了していないが、小川が反応しても良い場所が生じる(西阪, 2008)。しかし、小川は反応せず、被っているタープの外に携帯電話を持った手を出す(08行目、図1参照)。正裕が09行目で発話を続けていると、小川は「あ」と何かに気づいたことを示した後、まだ正裕の発話が終わっていない時点で「ごめん」と言うから「ちょっといい電話でて」と発話する(10行目)。この発話形式は許可を求める形式であり、相手の反応(許可または拒絶)が求められるものである。ただし、10行目の発話を産出するときの小川の手の動きを見ると、10行目の「いい」と言う時点で親指が携帯電話の左側の方に移動し(図2参照)、10行目の発話が終わった後、12行目の正裕の許可の発話が産出される前にすでに親指が右の方に動いている(図3参照)。このような指の動きは電話を受けるために画面をスワイプしているように見える。つまり、10行目の発話は許可を求める形式で組み立てられているが、正裕の反応を待たずに電話に出たことから、許可を求める行為ではなく、自分が電話を受けることを相手に伝えることが目的である、断りを入れる行為だと理解できる。

10行目の小川の行為がどのような相互行為をしているかを明確にするためには、この発話の産出位置に注目する必要がある。10行目の発話が産出された時点は正裕がまだ話している最中、つまり正裕の発話とオーバーラップする形で発話を産出している。会話では一般的に1度に1人が話すという発話順番の規則があるが(Sacks et al., 1974)、小川はこの規則を違反して発話を産出し始めている。相手が発話をしている途中に発話を開始することは多くの場合、相手(元の発話者)の発話を中断させる。⁽⁵⁾この位置で小川は発話の冒頭に謝罪表現「ごめん」を用いることによって正裕の発話を中断させたことに対して謝罪することができる。

しかし、ここに用いられた「ごめん」は相手の発話を中断したことに対する謝罪の働きだけ果たしているのではない。相手の発話を中断させることは、相手が述べていることとは性格が異なる発話の開始を示すことでもある。ただし、発話のオーバーラップが発話を中断させると

ということが明確に示されないと、相手の発話と異なる性格を持つ発話の開始を示すことも難しい。このような位置で発話の冒頭に「ごめん」を用いることはこのオーバーラップされて開始された発話が今までの会話の流れを中断させることを示しているので、「ごめん」の後は今までの活動とは異なる性格のかつどうが開始されることを予期することができる。このような「ごめん」の機能は今までの会話とは性格が違うことを述べ始めることを示す「誤置マーカ (misplacement marker)」（Schegloff and Sacks, 1973）として機能していると考えても良いだろう。まとめると、この位置の冒頭に用いられた「ごめん」は相手の発話を中断させたことに対する謝罪だけではなく、「ごめん」の後に行われることが今までの活動とは異なる活動として開始されることを予期するという、2つの働きを同時にしている。「ごめん」がこのような働きをしていると理解可能になるのは、相手の発話の途中という会話の中での位置と、発話の冒頭という発話内の位置の両方を見ることが重要である。

さらに、「ごめん」の後の発話からわかるように、正裕との会話の途中に電話に出ようとしている。このような行動は相手とのやり取りを中断させるので失礼になり、10行目の「ごめん」はこのような失礼なことに対する謝罪としても遡及的に理解できる。

以上のように、「ごめん」が置かれた位置から、単に「ごめん」の後の内容だけにかかわっているのではなく、その前後の両方に関わっていることが分かった。似た例として、相手の発話の途中ではないが、相手と行っている会話の途中に断りを入れる発話が産出されるケースを見ていきたい。断片(4)は昌美が知人の律子に山梨県の郷土料理である「ほうとう」の作り方を聞いている場面である。断片の直前から律子はほうとうの麺を作るために必要な材料を述べ、昌美はそれを紙にメモしている。二人は昌美が勤めている店の中で話しており、窓を開けているが、外はかなり雨が降っている。

(4) 【CEJC_K005_005_01:07】

- 01 律子: 塩は:,
 02 昌美: うん.
 03 (0.4)
 04 律子: 粉に対して:,
 05 昌美: うん
 06 (0.3)
 07 律子: 3パーセント.
 08 (1.0)
 09 昌美: 粉に対して3パーセン[ト].
 10 律子: [うん
 11 (1.1)
 12 律子: 1キロだったら, (0.2) | 30グラム:みたいな.

13



図 4

図 5

14 →昌美: **ごめんね**: やっぱし(さあ-) ちょっ | と° 閉めたい° =

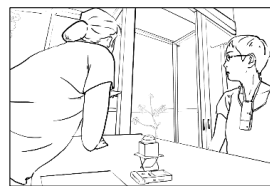


図 6

15 昌美: =私さ:>実はちょっと<耳が悪くて:,
 16 律子: あhh ((昌美, 窓を閉める))
 17 (0.5)
 18 昌美: ° なんかね:° (0.2)° んなに° 左が悪いん d --
 19 =ごめんな[さいちょ-やっぱひっ-
 20 律子: [あ-
 21 (0.7)
 22 律子: ° わかった.°

律子はほうとうの作り方について説明していて、昌美はメモしながら（図4参照）、「うん」と言ったり（02、05行目）、律子が話した内容を繰り返したり（09行目）して自分が聞き手としてふるまっていることを示している。律子の12行目の発話が終わった後、今までは律子の発話に対してこまめに反応をしていた昌美がこの位置では反応を行っていない。0.6秒の間、昌美は窓の方に視線を移し（図5参照）、14行目で「ごめんね」と言った後、「やっぱし(さ-) ちょっ」と言いながら立ち上がり、窓の方に体を傾けて左手を窓の方に伸ばす（図6参照）。そうしながら「° 閉めたい°」と小声で言いながら窓を閉め始める。この14行目の昌美の発話は自分がこれから何をするかについて述べる行為、つまり断りを入れる行為として理解できる。

断片（4）でも断片（3）と同じく断りを入れる発話の前に「ごめん」が用いられている。ただし、断片（4）の場合、発話が開始されている位置は断片（3）とは違って相手の発話の途中ではない。しかし14行目の発話が産出されている位置は、律子がほうとうの作り方を説明する活動がまだ完了しておらず、会話の流れの途中の位置で産出されている。

昌美は律子の説明に対して反応することが期待される位置で「ごめんね」と言うことによって、何か謝らなければいけないこと、つまり何か問題が生じたことを示している。発話の冒頭で「ごめんね」を使うことで直前までの会話の流れを（一時的に）中断させたことに対する謝罪を示すことと同時に、自分が今までの会話の流れとは異なることを行うことを予期させている。13行目からすでにメモしていたノートではなく、窓の方に視線を移していたこともその一つの証拠と言えるだろう。「ごめんね」と窓の方に視線を移すことによって今までの会話の流れを中断させ、窓（または窓の方）に関する別のことをこれから行うことを予期している。

「ごめんね」は会話の流れを中断させることに対する謝罪と同時に今までとは異なることをこれから開始することを予期する機能を果たしている。

「ごめんね」と言った後、昌美は「やっぱし」と言って自分の意見を変えることを示してから「ちょっと° 閉めたい°」と言うことで窓を閉めたがっていることを示す。二人が一緒にいる空間で相手の意見を聞かず、勝手に窓を閉めることは場合によっては失礼になる可能性がある。その問題を昌美は14行目で断りを入れることによって解決している。また、ここに「ごめ

ん」を用いることによって相手に対する申し訳ない気持ちを伝えることができる。したがって、この断片の「ごめんね」は会話の流れの中断と開始に志向していると共に、勝手に窓を閉めるという自分の行動についても申し訳ない気持ちを伝えていると考えられる。このように、「ごめん」が複数のことに志向していると言えるは会話の途中という会話内の位置と、発話の冒頭という発話上の位置まで考える必要がある。

以上、本章で扱った断片（3）と（4）にみられる「ごめん」は、厳密に言うとは異なる位置で産出されているが、相手と行っていたやり取りを中断させ、それとは別の会話を開始することを予期させる機能を果たしていた。この二つの断片からみると、既存の会話を中断させることと今までとは違う会話を開始することを予期することは同時に起きることのように見えるが、この二つが必ずしも同時に行われるとは言えない。次の章ではこの二つが区別されているデータを考察していきたい。

5. 会話が終わった後に産出される発話

本章では、他者との一連の会話が完了した位置で「ごめん」を冒頭に用いる断りを入れる行為を中心に分析し、その中で「ごめん」がどのような働きをしているかについて考察する。断片（5）では会話が終わった直後の位置で断りを入れる行為が行われるケースを、断片（6）では参加者が一緒に行っていた会話が終わり、長い沈黙が生じた後に断りを入れる行為が産出されるケースを考察する。

まず、会話が終わった直後に用いられる断りを入れる行為の中で「ごめん」がどのような働きをしているかについてみていきたい。二人の参加者が行っていた会話が終了に向かい、今の話題に関する会話が完了可能点に到達した位置で、「ごめん」がどのような働きをしているかについて考察する。断片（5）は歯科に診療を受けに来た患者と歯医者との会話である。患者は治療を受けるために横になっていて、歯医者は患者の顔の隣に座っている（図7参照）。治療を始める前に、親知らずの治療と管理が話題になっている。

(5) 【CEJC_K004_010_08:55】

- 01 歯医者： しっかり頭さえ出ちゃっててくれれば、
 02 患者： はい.=
 03 歯医者： =普通の歯抜くのと一緒ぐらい。：の感覚なんでね。
 04 患者： ああ：：
 05 (0.4)
 06 患者： じゃあなるべく抜か(h) [ない方が
 07 歯医者： [うんなるべく抜かな [いいですよ
 08 患者： [先生のどこ来た方が
 09 患者： .HHHHい [いいですね？
 10 助手： [huhuhuhuh
 11 (0.3)
 12 患者： 歯磨きを日々 [して

- 13 歯医者： [そうです | ね:=
- 14 患者： =はい.
- 15 (0.2)
- 16 →歯医者： ↓° ちょっと「ごめんなさい」° じゃ下の方から行きます.



図 7



図 8

- 17 患者： はい.(oga)
- 18 (0.4)
- 19 助手： はいじゃあ下の方から汚れ落としていきま.:.す.

歯医者は断片の前から親知らずの管理について説明をしていて、その後、患者は理解を確認する質問をして医者は答えている（06-14行目）。歯医者の応答の後、患者は「はい」と言う（14行目）。この発話は会話を終了させる要素として理解でき（Schegloff, 2007）、患者が開始した理解を確認する会話を収束させると同時に、親知らずに関する一連の会話も収束させることができると考えられる。

会話が完了可能な時点に至ったとき、歯医者は小さくて低い声で「↓° ちょっとごめんなさい°」と言ってから「じゃ下の方から行きます」と言うことで治療を始めることを示している（16行目）。この発話は歯医者自身がこれから何をするかについて述べることによって、断りを入れていると考えられる。16行目の発話を言う前から歯医者はライトを引っ張ることやモニターを操作することによって治療を始める準備をしていたが（図7参照）、「治療を始める」ことを明示的に示してはいなかった。歯医者は16行目で「ごめんなさい」と言いながら身体を患者の方に傾け、器具を持った両手を患者の顔の前に置くふりによって歯医者が治療を開始することが初めて明確になる（図8参照）。

16行目の「ごめんなさい」が発話された時点では、まだ謝罪の対象が明示されていない。したがって、謝罪表現の次に何について謝罪しているかが述べられることが予測できる。つまり、「ごめんなさい」がこの位置で発話の冒頭に用いられることによって、聞き手は「ごめんなさい」の次の発話を今までの会話の流れとは異なるものとして聞くことができる。

「ごめんなさい」が用いられた会話上の位置を見ると、直前まで行われていた質疑応答の会話が終わっても良い時点に到達した直後である。直前までの会話が終了可能になったところで参与者ができるのは大きく①直前の活動の継続（延長）、②新しい活動の開始の二つの中で一つだと考えられる。二つとも可能な時点で産出された「ごめんなさい」は話者が二つの中で何をしようとしているかを暗示させる。上で述べたように、謝罪対象が明確ではない状況で産出された「ごめんなさい」が直前までの会話の流れとは異なる新しい会話の開始を予期することは、直前までの会話とこれからの新しい会話を境界を明確にする役割をしているとも言えるだ

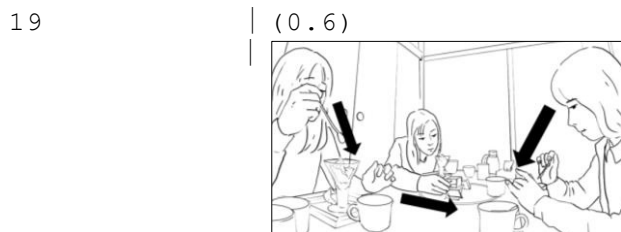
ろう。

歯医者は「ごめんなさい」の次に「じゃ下の方から行きます」と言ってこれから自分が何を
 するかについて説明する。歯医者が治療をすることは患者のためではあるが、とはいえ、患者
 の口の中で作業（治療）する以上、この活動は患者に不便を感じさせる可能性がある。だから
 この位置で断りを入れていて、発話冒頭の「ごめんなさい」は 16 行目の発話が終わる時点で遡
 及的に患者に不便を感じさせることに対しての謝罪としても理解可能になる。

最後に、長い沈黙が生じるほど、参与者たちがやり取りをしていないケースを分析する。長
 い沈黙は直前に行われた活動が完全に終了したことを明確にする一つの証拠である。このよう
 な状況で断りを入れることが、そしてその発話の冒頭に用いられる「ごめん」がどのような働
 きをしているかを次の断片で考察する。断片（6）では友達 3 人が飲食店でスイーツを食べな
 がら話している。3 人は違うデザート注文し、スイーツの上にかかっているソースやトッピ
 ングが話題になっている。

(6) 【CEJC_T011_007_14:03】

- 01 ユミエ： くろみつ：：？[じゃないようね：。
 02 マユ： [いや、抹茶ソースみたいな[やつ。
 03 サキノ： [うん。
 04 ユミエ： ふ：：ん
 05 (0.3)
 06 マユ： だっ[た.こっちはね？
 07 ユミエ： [こっちはほら、
 08 (0.2)
 09 ユミエ： く[ろ蜜なんだけど：、
 10 マユ： [う：ん
 11 (0.7)
 12 サキノ： う：：[ん あ、↑黒[蜜なんだ：。
 13 マユ： [うん [黒蜜なのこっちは[ね？
 14 サキノ： [へえ：：
 15 ユミエ： そう。
 16 (2.6)
 17 ユミエ： う：：ん
 18 (1.8)



20 →マユ : ° **ごめんね**: ちよつと° ちゃんとあがつ[てるか
 21 ユミエ: [動いてんの？

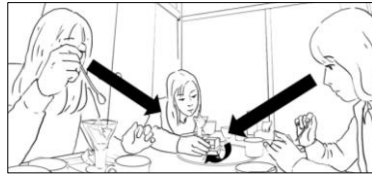


図 12

22 (0.3)
 23 マユ : うん.
 24 (3.1)
 25 マユ : 大丈夫.

3人はお互いのデザートにかけられているものが何かについて話している。やり取りとりは15行目のユミエの発話「そう」で収束し、各自デザートを食べ始めることで長い沈黙が生じる。長い沈黙の間、ユミエとサキノはデザートを食べているが、このデータの撮影担当者であるマユはテーブルの真ん中に置かれているカメラ（図9参照）に向かって体を傾ける（図10参照）。そして、カメラの方に手を伸ばし（図11参照）、「ごめんね」と言った後「ちよつとちゃんとあがつてるか」と断りを入れながらカメラを掴んで少し回す（20行目、図12参照）。20行目は「ちゃんとあがつているか」までしか発話されていないが、その後ろは「確認している」のような述語が省略されていることが理解できる。

マユが20行目の発話を産出する前にはかなり長い沈黙が生じていた。その間に他の参加者は自分のデザートを食べていたため、3人が一緒に行っていた会話は明らかに完了されていることがわかる。長い沈黙の後に発話された「ごめんね」は、その直前に謝罪の対象が示されていないのでそのあとに謝罪対象について何かを述べることで、つまり何か新しいことの開始が予期される。直前まで行っていた活動が明確に収束され、長い沈黙まで生じているので、この断片での「ごめん」は直前までの会話の流れの中断などはしておらず、新しい会話の開始だけを予期していることが今までの断片との違いである。

また、新しい会話の開始を「ごめん」で始めることは、その次に来る発話の内容とも関係がある。20行目で行っている断りを入れる行為は、マユ自身がカメラの状態を確認することを他の参加者たちに伝えている。録画がうまくされているかどうかを確認することは他の参加者に被害を与えることではない。カメラが置かれている位置を見ても他の参加者の領域を侵害したりする場所ではない（図9参照）。しかし、すでに撮影が始まっている状況で録画中のカメラを触ることは適切ではない行動としてとらえる可能性がある。したがってマユはここで断りを入れることによって問題になる可能性があることを自分も認識していることを示している。そしてこの発話の冒頭に用いられた「ごめんね」は自分がしている活動が適切ではない可能性に基づいて謝罪していることが遡及的にわかる。

以上のように、本章では直前の会話の中断と新しい会話の開始が必ずしも同時に行われるのではないということを二つのデータを用いて確認した。断片（5）と（6）は断りを入れる行為は産出される位置が微妙に異なっていたが、二つの断片とも直前まで行われていた会話を中

断させるような位置ではなかったため、「ごめん」が中断を示す働きはしていなかった。ただし、発話の冒頭に「ごめん」を用いることによって謝罪表現と関りがある新しい会話・活動が開始されることを予期していた。

6. おわりに

本研究では、謝罪表現「ごめん」が断りを入れる行為の一部として用いられるときにどのような相互行為上の働きをしているかについて注目した。さらに、「ごめん」を発話の冒頭に用いるケースを中心に、この発話が会話の流れのどの位置に用いられるかについても具体的に分類し、分析を行った。

断りを入れる行為は、自分がこれからすること（または今していること）を相手に何も言わずに行った場合、失礼にあたる可能性があることを話者が認識していることを示していた。さらに、断りを入れる行為を構成する際に謝罪表現を加えることによって、単に自分が認識していることを示すだけではなく、相手に申し訳ない気持ちまで伝えることができる。

本研究では断りを入れる行為の冒頭に置かれる「ごめん」が、第4章では直前までの会話の流れを中断することと共に、新しい会話の開始を予期する働きをしていることが分かった。それに対して第5章で考察した「ごめん」は中断の働きはしておらず、新しい会話の開始の機能だけを果たしていることが確認できた。このように、本研究で扱った「ごめん」が第4章と第5章で異なる相互行為をしていることは、この発話が会話の流れの中のどの位置で産出されているかを分析の対象に入れることによって見えるものである。しかし、二つの章で考察した4つのデータで「ごめん」が新しい会話の開始を予期する働きをしていることが同じく観察できたのは、断りを入れる行為発話の冒頭という、発話内の位置が同じだったからだと考えられる。これは断りを入れる発話を文脈から取り出して分析するとわからないことであり、この行為が会話の流れの中でどの位置で産出され、なぜ今この位置で産出されているのかを見ることが重要であった。

謝罪の対象が言及されていない状態で、発話の最初に「ごめん」と言われると、それが何に対する謝罪なのかが曖昧である。しかし、その曖昧さが会話の中で問題を起こすのではなく、むしろその曖昧さが「ごめん」が単なる謝罪の機能だけをしているのではなく、相互行為の中で複数の働きをしていると理解することができるカギになっていると考えられる。

謝辞

本稿の内容の一部は第97回人工知能学会言語・音声処理十対話処理研究会における発表内容に基づいている。また、論文に対して貴重なコメントをくださった林誠先生、安井永子先生、

中馬隼人氏、伊藤亜紀氏に深くご礼申し上げます。最後に、査読者の方にも貴重なご指摘を多くいただいた。記して感謝する。

注

- (1) 本研究では「ごめんね」、「ごめんなさい」などの「ごめん」系の表現すべてを考察対象に含めている。
- (2) 本研究で扱うデータの中で許可を求める発話形式で断りを入れる行為に対して「拒否」を示す反応を行うケースは受け手が冗談交じりで反応するケースのみだった。
- (3) 「すみません」が使われた2つのケースの中で1つは断りを入れる発話の前に、もう1つは発話の後に用いられていた。
- (4) データの書きおこしに関する記号は以下の通りである。

記号	意味	記号	意味
[発話の重なるの開始	↑文字	直後の音が高い
]	発話の重なるの解消	↓文字	直後の音が低い
=	前後の発話が切れ目なく続く	°文字°	弱く発話
(数字)	沈黙の秒数	hh	息を吐く音
(.)	ごく短い沈黙	.hh	息を吸う音
文字:	音の引き延ばし	huh/hah	笑い
文字-	話や発話の中断	文(h)	笑いながら発話
文字.	尻下がりの抑揚	>文字<	早く発話
文字?	尻上がりの抑揚	()	聞き取れない部分
文字,	継続を示す抑揚	((文))	データについての説明
➡	ターゲットになる発話		身体動作が起こった場所を示す

- (5) 相手と発話がオーバーラップされたとして、それが必ずしも相手の発話を中断させるのではない。オーバーラップされた発話の産出位置や、発話の内容によってそれが相手の発話を中断させるのではなく、話者の理解を示すことや、会話の進行を進める働きをする場合もある (Jefferson, 1984; Schegloff, 2000)。

参考文献

Brown, P., & Levinson, S. C. 1987. *Politeness: Some universals in language usage (Vol. 4)*. Cambridge university press.

- Goodwin, C. 1987. Unilateral departure. Button, G., & Lee, J. R. (Eds.), *Talk and Social Organisation. Multilingual Matters*, 206–216.
- Jefferson, G. 1984. Notes on some orderlinesses of overlap onset. In V. D' Urso. and P. Leonardi. (Eds.) , *Discourse analysis and natural rhetoric*. pp. 11-38.
- Jefferson, G. 2004. Glossary of transcript symbols with an introduction. Lerner, G. H. (Ed.), *Conversation analysis: Studies from the first generation*, 13-31.
- Sacks, H., Schegloff, E.A. and Jefferson, G. 1974. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50, (4), 696-735.
- Schegloff, E. A. 2000. Overlapping talk and the organization of turn-taking for conversation, *Language in Society*, 29 (1), 1-63.
- Schegloff, E. A. 2007. *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis I (Vol. 1)*. Cambridge university press
- Schegloff, E. A. and Sacks, H. 1973. Opening up closings. *Semiotica*, 8, 289-327.
- 岸本健太. 2019. 「日本語における感謝の方法-申し出と依頼の会話分析から」, 『人工知能学会第 85 回言語・音声理解と対話処理研究会資料』, 1-6
- 熊谷智子. 1993. 「研究対象としての謝罪—いくつかの切り口について—」, 『日本語学』12, (12), 4-12
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香. 2022. 「『日本語日常会話コーパス』設計・構築・特徴」, 『国立国語研究所「日常会話コーパス」プロジェクト報告書』6.
- 佐久間勝彦. 1983. 「感謝と詫び」, 『講座日本語の表現』, 水谷修(編). 筑摩書房, 54-66.
- 佐藤啓生. 2011. 「現代日本語の謝罪言葉に関する研究」, 『岩手大学大学院人文社会科学研究科研究紀要』20, 岩手大学大学院人文社会科学研究科, 21-38.
- 滝浦真人. 2008. 『ポライトネス入門』. 研究社.
- 西阪仰. 2008. 「発言順番内において分散する文: 相互行為の焦点としての反応機会場」, 『社会言語科学』10(2), 83-95.
- 日高慶美. 2017. 「日本語の謝罪表現「ごめんなさい」と「ごめん」について: ポライトネス理論からのアプローチ」, 『国際広報メディア・観光学ジャーナル』24, 39-55.
- 日高慶美. 2019. 「日本語の謝罪表現「ごめん」と「ごめんね」について: ポライトネス理論の観点から」, 『国際広報メディア・観光学ジャーナル』28, 71-88.
- 山本もと子. 2004. 「社会的相互行為としての謝罪表現-言語表現選択の背景には何があるのか」, 『信州大学留学生センター紀要』5, 19-31.
- 頼美麗. 2008. 『依頼場面における「謝罪」と「感謝」—「待遇コミュニケーション」の観点から—』, 早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文.